

85年の歴史に幕

門司高生 最後の巣立ち

卒業生「母校 心の中に」

今月末で閉校となる門司区丸山、県立門司高(谷口孝文校長)で3日、卒業式と閉校式が行われた。併設されている継承校、門司学園高の在校生らが見守る中、最後の「門高生」195人が巣立ち、85年の歴史に幕を下ろした。(江上純)

卒業式には卒業生や保護者、教職員、門司学園高2年生ら計約860人が出席した。谷口校長が「最後の卒業生となる皆さんには、高い志と意欲を持って社会のために力を発揮してほしい」と激励。卒業生を代表して日笠里映さん(18)が「門司高校という港から、社会という大海原に力強く旅立ちます。母校の姿は心の中で生き続ける」と声を震わせながら答辞を述べた。

引き続き行われた閉校式には同窓生らも含め計約940人が出席し、石田紘一郎・同窓会長が「多くの子弟を育てたこの学びやがこの日を迎えることにはじける思いがあるが、今後とも歴史が門司学園高校で引き継がれることを期待した



門司高校旗を折りたたむ小林さん(左)と上杉さん

試験免除あだて出場辞退

閉校式後の懇親会では、学校側のミスで出場辞退したため「幻の甲子園出場」となった1952年当時の野球部員に、学校側からおわびの気持ちを込めた「功労賞」が贈られた。

門司東高の校名だった当時、野球部は選抜高校野球大会への初出場を決めた。ところが、学校側が部員の学年末試験を免除し、練習合宿させていたことが発覚。部員の体調を考慮しての措置だったが、問題視され、出場辞退に追い込まれた。

当時の野球部員に功労賞

栄光の歴史を埋もれた過去にしてしまったことに対し、谷口校長が「閉校する前に、唯一甲子園への出場権を獲得した部員たちの努力と栄誉をたたえ、きちんとおわびしよう」と発案。部員13人の消息を調べ、連絡が取れた5人を招いた。

5人(1人は代理)は順番にステージに上がり、谷口校長から記念の盾を受け取った。同窓生ら約310人からは大きな拍手が送られ、野球部の後輩らから握手を求められる場面もあった。

当時1年生の主戦で、卒業後はプロ野球・南海ホークスで1、2年目に最多勝に輝いた宅和本司さん(73)

「幻の甲子園」 57年ぶり光



功労賞を授与された元野球部員ら(中央が宅和さん)

(大阪市)は「当時は本当に悔しかった。プロでも甲子園経験があるかないかで待遇は全く違った。でもそれが『何とぞ』と奮起する原動力になった」と振り返る。「この盾は高校3年間の努力の証し。良い思い出になった」と話していた。

好打の一塁手だった白野克己さん(74)(門司区旧門司)は体調不良で、妻の久美子さん(67)が代理出席。克己さんは長年複雑な心境を抱えていたという。久美子さんは「この盾を見せればきっと夫の心も安らぐでしょう」とほほ笑んでいた。

い」とあいさつ。卒業生的小林健人さん(18)と上杉美絵さん(18)がステージに上がり、掲げられていた校旗を折りたたみ、谷口校長に手渡した。

最後に、創立15周年を記念して北原白秋と山田耕柝が作った「第二校歌」を出席者全員で斉唱した。

門司高は1923年(大正12年)、県立門司中学校として設立された。戦後の学制改革で48年に門司高と

なり、49年に門司東高に改称されたが、64年に再び門司高となった。

閉校は県教委の高校再編整備計画に基づくもので、2007年に県立門司北高(門司区狼喰)と統合される形で中高一貫校・門司学園高が開校されたのに伴い、「門高」の校名は消えることになった。85年間の卒業生は計約1万8000人。

一方、門司北高でも1日、卒業式と閉校式が行われた。最後の卒業生105人が学びやを後にし、1907年(明治40年)に門司市立門司高等女学校として設立されて以来101年を数えた歴史を閉じた。卒業生は計約1万9000人。

4月からは、現在の門司高の校舎が門司学園高の校舎に、門司北高の校舎が門司学園高と中高一貫教育を行う門司学園中の校舎になる。